

「名東図書館どくしょ会」 第4回 結果レポート

平成26年6月21日(土) 10:30-12:00 名東図書館集会室

参加者 7名(一般)

進行 1名(名東図書館)

テーマ本 『嵐が丘』 E. ブロンテ/著

《あらすじ》

「嵐が丘」の主人に拾われた浮浪児ヒースクリフは、養父の死後、その息子に虐待され、熱愛していた娘キャサリンにも裏切られ家出し、三年後に金持ちになり紳士の風貌になり帰ってくる。しかし、すでにキャサリンは地主のエドガー・リントンに嫁いでいた。それから、ヒースクリフの復讐が始まる。ヒースの生い茂る荒野に繰り広げられる激しい情念のぶつかり合い、愛憎劇を、下女ネリーとロンドン紳士のロックウッドが語る。

司：では、お一人ずつ、お名前とちょっとした感想、テーマ本を5点満点で点数づけして述べてください。

か：翻訳ものは初めてだけど、面白かった。暗い話と思わず読み始めたら、どんどん暗くなって(笑)・・・海外旅行と歴史旅行を同時にできてよかったなど。悪魔的なヒースクリフが怖くて、キリスト教を信仰するのかなと、そんなことも思った。 5点。

山：東図書館でチラシをみて参加。たくさんの参加者がいて、ぼくは後ろの席ですわってきいているだけと思ってきたけど、発言させられて(笑)、昔読んだし映画もみたし小説の批評の本も手に入れたので、あとは読むだけ。上だけ読んで参加してます。読むきっかけをもらいました。半分だけなので、3点。

真：10代の時読んですごい本だとおもった。今まで3回は読んでいる。名東文化小劇場で映画もみた。人物像が圧倒的で、その個性で物語をひっぱっていている。読ませる本だが、引き込まれない人にはしんどいかも。ラジオで訳者の鴻巣友季子さんが「昼メロそのもの」と言っていた。下女のネリーの語りだけで話がすすみすごい。普遍性があるのでさすが古典と思った。でも、4点。

松：むかし、途中まで読んでこわくてやめた。(笑) さきほどのラジオを私もきいて、そうかそう読めばいいのかと思ったら、すらすら読めた。(笑) ヒースクリフは狂ったのか、ほんとに恋愛したのかと迷って考えた。でも、最後まで読めてよかった。 4点。

み：古い全集で読んだので、コトバが古くて読みづらかった。3ページよんだらいやになる。(笑) 登場人物の名前はいろいろ変わるし、いい人はでてこないし、お金は盗ってしまうし・・・なんの得るところもない本だった。(笑) これが、あの、ゆーめーな「嵐が丘」かと

思った。(笑)ヒースクリフはなぜ死んだのか？皆さんののはなしを聞きたいです。 2点。

本：小さいころ、少年少女向けでよんだ。新訳が出たというので読みました。言葉もストーリーもすさまじい。ヒースクリフも、もうやめてくれーって感じて好きじゃない。でも、作者ブロンテはすごいと思う。 3点。

い：自分が多感なときに読んだ。そのときは、ヒースクリフとキャサリンしか頭に残らなかった。60歳を超えてよんだら、ネリーが話したことだったとわかった。ネリーはヒースクリフにもキャサリンにも同情せず、ネリーが育てたキャシー（キャサリンの娘）とヘアトン（キャサリンの甥。虐待されて育つが素質は良くてラストはキャシーと好きあう）の二人が幸せになる、ということなんだなと。自然のなかにとけこんだすごいストーリー、全体の構成もすごい、と思った。 4.5点。

イ：ネリーの語りがすごく魅力的。5点。ほんとに面白い。いじわる、ユーモア、愚痴、批判、よくかけている。けど、訳者によって、ずいぶん印象が違うと思う。古い訳ではよむのが大変だと思います。新訳、とくに女の人の訳がしっくりくると思う。

司：では、まず、「なぜヒースクリフは死んだのか」あたりから。どなたか口火を切ってもらえますか。

○：キャサリンが先に死んで、耐えられなくなった。体は丈夫だけど精神的にたえられずブロークンハートで死んだ。ほんとに心が壊れたんだと思う。

○：キャサリンの亡霊はヒースクリフにはでてこないですね。でてきて欲しいのに。

○：彼は墓を暴くね。そこまでするとはやはり精神がおかしくなっていると思う。

○：ヒースクリフは、キャサリンを失った喪失感でこうなったんだろうね。すごすぎるけど、ネリーさんのヒースクリフへのつぶやき「あれはなんだったのだろう」は、まさしくヒースクリフのすごさの思いだったのだと思う。それにしても、ネリーは口が悪いなあ。

○：この話は恋愛ではないと思う。ヒースクリフとキャサリンは一身同体。「ヒースクリフと私の魂はおなじなの」というように、恋愛とかではなく、同じ人格っていうかんじ。ヒースクリフに悪い印象はない。こうならざるを得なかったと同情する。ヒースクリフにはキャサリンしかいないから。

○：西洋では、2つのものが一つになるのが恋愛らしい。プラトンなんかそう言っている。まさに、フォールインラブ、二人で恋に落ちる…。

○大学の授業でプラトンを読んだとき、プラトンは同性愛で、女性は恋愛の対象ではなかった記憶がある。いわゆる恋愛はいつ始まったのか、近代からかなあ。

○：英語のラブはとても広い言葉で、ちょっとした花にもラブといいますね。

○：日本の恋愛は、もっとさらっとしている感じがします。

○：でも、平安時代の貴族なんかは、どろどろしてましたよね。

○：庶民は、さらっと…（笑）

○：ヒースクリフはファンタジー的。なぜ、アーンショウ（拾ってくれた養父）に可愛がられたのかわからないなあ。

○：ロンドンには捨て子があふれていたもので、金持ちは拾って養うこともあったのではないかな。

○：一説には、ヒースクリフはアーンショウがロンドンで生ませた私生児。だから、可愛がるし、キャサリンとは異母兄弟になるので、結婚はできない・・・とか。

○：ありえるけど、この小説には心温まるエピソードがない。唯一、救いが感ぜられるところだと思う。

○：ヒースクリフをよくここまで悪魔みたいに、描けたと思う。

○：3年たって嵐が丘にもどってきたヒースクリフを蔑んで言うのに、この訳者の鴻巣さんは「田吾作」ってコトバを使っています。古い訳だと、「下男」、「作男」や「野良男」なんて訳されている。この訳者はブツとんでると思うけど、とても読みやすい。

○：「田吾作」はちょっと意味が違ってくると思うけど…。

○：ここまで、ひどい人間に描けたのは、ブロンテが変わった人で、世間とうまくやっていけない人、人つきあうのが下手な人だったことがあるようだ。

○：ブロンテは男っぽい、人だったようです。犬と走り回り、孤高の人。キャサリンも男っぽいですね。6歳のときお土産に、馬のムチをねだってますよね。

○：ブロンテは、法律もよく勉強している。イギリスの女の人には遺産相続権がないのにび

っくりした。女の人の権利は日本なんかより、ずっとすすんでいると何となく思っていたので、女王がいるし、サッチャーもいたし…

○：私はブロンテは詩がすごいと思う。あらゆる自然と一体化して、自分の足で一人で立っている。魂が孤独な詩人だったと思う。

○：ヒースクリフもキャサリンもリアルな人間とは思えませんね。

○：そうだよ、なんで食っているのか、生活感がまるでない。小作人がいるとか、農場でこうだとかそういったことが描かれていない。ヘアトンはネリーに育てられたようだが、彼だけがリアルな赤ちゃんとして描かれていて印象に残った。

○：ヒースクリフも、どうやって金をもうけて、どうやって品性を身につけたのか、まったくかかれていない。

○：キャサリンは人間としてまとまりがないですね。やさしさがなくて自分勝手。ヒースクリフを自分の一部分ととらえ、エドガーと結婚する。ヒースクリフがまさか自分から離れていなくなるとは思ってもみなかったんだろう。ほんとに自分中心主義。(笑)

○：娘のキャシーのほうが、魅力があるね。正直で、まじめで。

○：エドガー（キャサリンの結婚相手。紳士だが体が弱い）は、この本の良心ですね。

○：ヘアトンもいい人ですね。

○：純情でいい。唯一、ホッとする人。

○：でも、ヘアトンを教育してきちんと育てるという筋書きに、違和感がある。この小説全体像からみて、なじまないなあ。ここだけ、まともに感じられる。

司：ジョゼフ（アーンショウ家の老僕）はどうでしょう？

○：ああいう人はいたと思う。映画にもでてくるし。

○：下男のわりにはいばっている。彼の天下ですね。

○：まわりは、彼を無視している。それで、回っていくのだから、不思議です。

○：ここにでてくる召使は、強いですね。決められたこと以外はしない。ネリーなんか「わたしは、あなたの世話をするために雇われたのではない」ときっぱり断りますね。

○：国民性ですね。日本だと範囲を超えてもサービスするし、それがいいということになっている。彼らは領分を犯すことは手をださない。きっぱりしている。

○：ネリーは本当のことをしゃべっているのか不信感はあるけど、小説としては面白いな。

○：ロックウッド（嵐が丘に家を借りに来た若い紳士）も語って聞かせる役割ですね。

○：ブロンテはロックウッドに対して、ロンドンの坊ちゃんに我々の厳しい自然の田舎の生活がわかるか、という気持ちで描いていると思う。都会育ちに、わかるもんかって（笑）

○：なるほど、ロックウッドはキャシー（キャサリンの娘）に気があったみたいだから、失恋することになりますね。だから、キャシーとヘアトンが寄り添う姿を遠くに見て、挨拶もせず、逃げるようにかえっていく。（笑）

○：この本よんで、本音で生きてて、本音でぶつかりあってって、うらやましくて、こうありがたいなあっておもった。なんか、自分たちは気をつけて生きているなあって。

○：もっと、本音をぶつけて生きてもいいんじゃないかと思いますね。

○：ある高校へ仕事でいったら、高校生の表情のないことに驚いた。以前はもっと、おしゃべりしたり、冗談言ったりしてたのに。

○：気を使いすぎのところと、自分の興味の範囲が狭くて、興味のわからないことには無関心ってことじゃないかなあ。

○：日本人は気をつかいすぎですね。

○：当主とかそういう立場の人は気を使っているね。エドガーも一族のことにとっても気をつけている。それはいいんだけど。

○：ふつーの人は、本音で生きていきたいね。

名東文化小劇場でみたローレンス・オリビアの『嵐が丘』の感想や、あちこちに話題がとび、まとまりはなかったのですが、話は途切れることなく盛り上がり、「嵐が丘」の古典としての力に魅了された参加者のみなさんでした。